(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第１輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

向井池遺跡

―― 試掘調査報告書 ――

1985

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序　　文

関西国際空港の建設が具体的日程にのぼる過程で、当該地域に分布する文化財の保護と調査をめぐる問題が大きく浮かび上がってきた。そこでいろいろな方法が検討されたが、本府教育委員会の機能を補完し、事業を執行する機関として財団法人大阪府埋蔵文化財協会を設立し、空港関連事業にかかる埋蔵文化財の発掘調査をおこなうものとした。

ここに報告する向井池遺跡をはじめ近畿自動車道和歌山線建設に伴う試掘調査はその嚆矢となる。本遺跡は分布調査の結果に基づいて試掘調査を実施したものであるが、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。したがって道路予定地内における今後の発掘調査は必要ないと判断したものである。

今後空港関連事業の進展につれ、この方面の埋蔵文化財の状況が一層明らかになり、その保護についても対応が必要になると思われる。財団法人大阪府埋蔵文化財協会ともども全力を尽くしていく所存である。大方のご支援、ご鞭撻をお願いするものである。

昭和60年7月31日

大阪府教育委員会事務局文化財保護課長

吉　房　康　幸

39752

大阪府文化財センター
図書
39752号

序　　文

本協会は、昭和60年４月１日大阪府の全額出損によって法人として設立されたもので、事業目的の１つとして、関西国際新空港建設に伴う各種公共事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査事業を大阪府教育委員会の指導のもとに実施することになっております。

今回、試掘調査を実施いたしました向井池遺跡は、協会発足後、最初に手掛けた調査のひとつであります。

向井池遺跡は、泉州方面の山側を通過する近畿自動車道和歌山線の道路建設予定地に所在し、いままでには調査は、ほとんどおこなわれずに現在に至っているため、日本道路公団大阪建設局との協議により、遺跡の性格等を確認するために、まず試掘調査を実施したうえその後の調査を検討することとなり、調査を実施したものであり、その結果、遺構・遺物を検出することが出来ず、道路予定地内では、今後の調査は必要ないとの結論を得たものであります。

本調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局、岸和田工事々務所、泉佐野市教育委員会、その他地元関係者に多大のご協力、ご支援をいただいたことに深く謝意を表します。今後も本協会の調査事業にご支援、ご指導を願います。

昭和60年７月31日

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
理事長　黒　田　幸　雄

例　　言

1．本書は近畿自動車道和歌山線建設に伴う発掘調査のうち、泉佐野市上之郷に所在する向井池遺跡の試掘調査報告書である。

2．調査は日本道路公団の委託を受けて、大阪府教育委員会の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3．調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第３班（班長　渡辺昌宏）が担当し、技師　渋谷高秀、田中一広が現地調査にあたった。調査は昭和60年６月１日に着手し、同年７月31日に事業を終了した。

4．調査の実施にあたっては、日本道路公団岸和田工事事務所及び泉佐野市教育委員会、鈴木陽一氏の協力を得たほか、藤田正篤氏の教示を得ることができた。

5．本書には今回得られた遺物のほか、藤田正篤氏採集の遺物も併せて記載した。

6．本書の執筆及び編集は渋谷・田中が担当し、岡本圭司の協力を得た。なお、「Ⅰ．調査に至る経過」は、調査課課長　井藤　徹が執筆した。

目　　次

序文
序文
例言
Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の環境 …… 1
Ⅲ．調査方法と成果 …… 7
　1．調査方法 …… 7
　2．調査成果 …… 9
Ⅳ．まとめ …… 19

挿　図　目　次

第1図　向井池周辺の遺跡分布図（S＝1／50,000）
第2図　向井池遺跡採集石鏃実測図（S＝1／1）
第3図　調査地割付図（S＝1／5,000）
第4図　トレンチ位置図（S＝1／2,000）
第5図　A・B・D・E地区土層断面図（S＝1／80）
第6図　C地区土層断面図（S＝1／80）

表　目　次

第1表　遺跡一覧表
第2表　試掘トレンチ観察一覧表

図　版　目　次

図版1　調査地航空写真
図版2　向井池遺跡遠望　全景（東より、西より）
図版3　各調査地区全景　C地区東部（東より）　C地区西部（西より）
図版4　各トレンチ部分　①②　A地区東部、西部（西より）、③ 12トレンチ全景（北より）
　④⑤ 段部分（東より、南より）、⑥ 東壁土層（西より）、⑦⑧ 3トレンチ西壁部分、石垣（東より）
　⑨ 20トレンチ全景（東より）、⑩ 17トレンチ東壁（北より）
図版5　向井池遺跡出土遺物　調査地、藤田正篤氏採集遺物

Ⅰ．調査に至る経過

向井池遺跡の発掘調査に至る経過は、昭和30年代後半に大阪府と和歌山県を結ぶ国道26号線の交通量増加に対応するため、新たに高速自動車道、一般国道の新設が計画された。一般国道については、国道26号線のバイパスとして第二阪和国道が計画され、泉州地方の平野部を通過し、その道路建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査が実施された。発掘調査の結果、和泉市池上遺跡、堺市四ツ池遺跡等は、国指定史跡に指定あるいは答申がなされた遺跡も検出された。

高速道路については、昭和48年に近畿自動車道和歌山線としての協議が大阪府教育委員会にあり、昭和49年度に予定路線内を幅約１㎞、延長約30㎞にわたって埋蔵文化財の分布調査を大阪府教育委員会で実施した。その結果、堺市より阪南町にかけて、約60カ所の遺跡・遺物散布地等が判明し、その後大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局との協議の結果、近畿自動車道和歌山線内に24カ所の遺跡が所在することが判明した。

これら24カ所の遺跡の内、本協会が発掘調査を実施する遺跡は、７カ所の予定であり、昭和60年４月以降４カ所の遺跡の試掘調査を実施することとなり、６月１日より向井池遺跡の試掘調査を実施した。

Ⅱ．遺 跡 の 環 境

向井池遺跡が位置する泉州南部、泉佐野市域の地形は、基盤山地より丘陵及び洪積段丘高位面が派生し、その縁辺部に洪積段丘中位面や低位段丘が形成され、見出川、佐野川、田尻川、樫井川がこれら地形を分断するように流れる。各河川の下流域には沖積段丘や氾濫原が発達する。主要な遺跡は、各河川流域の洪積段丘や沖積段丘面に位置し、旧石器から近世に至る各時代の遺跡群が周知されている。向井池遺跡の所在する上之郷の地は、基盤山地や洪積段丘高位面及び丘陵部に位置し、現在山林及び水田が広がっている。

泉州南部で人間が生活を始めたのは旧石器時代で、男里川流域の両岸に展開する、洪積段丘に立地する玉田山遺跡や蓮池遺跡で有舌尖頭器が出土している。縄文時代の遺跡は、泉州地域では丘陵に立地するとされる早期から中期にかけての時期のものは明確ではないが、低位段丘や砂丘上といった低地に進出し、遺跡数が増加するとされる後期から晩期にかけての時期のものが存在する。三軒屋遺跡が上げられ、縄文後、晩期の遺構・遺物が数多く

第1図　向井池周辺の遺跡分布図（S＝1／50,000）

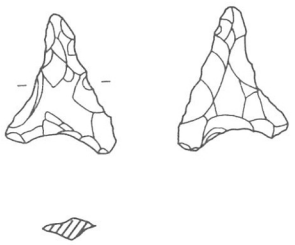
1	東円寺跡	寺院跡	平安末	野田神社神宮寺
2	檀波羅密寺跡	〃	室町	須恵器、土師器、瓦器、石鍋、サヌカイト
3	岡本廃寺	〃	平安後期	
4	ダイショウ寺跡	〃	平安？	唐草文軒平瓦、土師器、須恵器
5	禅興寺跡	〃	奈良前期	心礎、布目瓦、塼
6	別所廃寺	〃？	平安～室町	屋瓦、瓦器　※協会報告書参照
7	海会寺跡	寺院跡	奈良前期	基壇、礎石、屋瓦（法隆寺式？）
8	仏性寺跡	〃	平安～室町？	布目瓦、土師器
9	平野寺跡	〃	平安	
10	林昌寺跡	〃	平安後期	軒丸、軒平瓦、布目瓦露呈
11	日根神社遺跡	散布地	弥生～中世	石鏃、サヌカイト、須恵器、土師器、瓦器、瓦
12	向井池遺跡	〃	弥生～中世	石鏃、サヌカイト、瓦器
13	日根野城跡	城跡	中世	土師器、瓦器
14	長滝遺跡	散布地	弥生・中世	弥生式土器、瓦器
15	松原遺跡	〃	弥生後期～古墳	土師器、須恵器、製塩土器
16	羽倉崎遺跡	〃	古墳	土師器、須恵器
17	船岡山遺跡B地点	〃	縄文晩期～弥生中期、古墳	縄文式土器、弥生式土器、サヌカイト、須恵器
18	船岡山遺跡A地点	〃	弥生後期	包含層20cm、住居跡、弥生式土器
19	船岡山遺跡C地点	〃	縄文晩期～弥生前期	サヌカイト
20	船岡山南遺跡	〃	弥生後期～中世	弥生式土器、土師器、須恵器、瓦器
21	田尻遺跡	〃	古墳	須恵器、土師器
22	夫婦池遺跡	〃	弥生中期～古墳	弥生式土器、石包丁、土師器、須恵器、瓦器
23	道池遺跡	〃	弥生中期～古墳、中世	弥生式土器、サヌカイト、土師器、須恵器
24	樫ノ井城跡	城跡	中世	
25	諸目遺跡	散布地	古墳～	須恵器、土師器
26	三軒家遺跡	〃	縄文後期～弥生後期、古墳、中世	縄文式土器、弥生式土器、石鏃、土製耳飾、土師器、須恵器、瓦器
27	フキアゲ山東遺跡	〃	縄文前期・古墳・中世	縄文式土器、須恵器、土師器
28	新家オドリ山南遺跡	〃	弥生・古墳	須恵器、サヌカイト
29	新家オドリ山東遺跡	〃	弥生	弥生式土器、石槍？
30	新家オドリ山遺跡	〃	弥生・古墳	弥生式土器、住居跡、須恵器
31	一丘神社遺跡	〃	弥生・古墳、奈良	須恵器、土師器、サヌカイト、掘立柱建物群
32	北野遺跡	〃	平安～中世	土師器、瓦器、掘立柱建物
33	海宮宮池遺跡	〃	縄文	ポイント、石鏃、サヌカイト
34	向井山遺跡	〃	弥生中期、奈良	弥生式土器、投弾、石庖丁、須恵器
35	孤池遺跡	〃	弥生	石鏃、刃器、サヌカイト
36	前田池遺跡	〃	古墳・中世	須恵器、瓦器
37	男里遺跡	〃	弥生・中世	弥生式土器、サヌカイト、瓦器
38	天神ノ森遺跡	〃	古墳	須恵器
39	幡代遺跡	〃	弥生	弥生式土器
40	兎田古墳群	古墳	古墳	7基の小円墳群
41	鏡塚古墳	古墳？	古墳	
42	城の塚古墳	古墳	古墳	円墳？、須恵器、土師器　『和泉志』消滅
43	下村古墳群	〃	古墳	円墳、横穴式石室、須恵器、金環
44	新家古墳群	〃	古墳	4基の円墳群、竪穴式石室、横穴式石室、須恵器、埴輪
45	兎田古墳群	〃		
46	引谷池窯跡	窯跡	奈良	布目瓦、瓦器　消滅
A	中家住宅	建造物	江戸初期	桃山様式残す土農住宅　重要文化財
B	降井家書院	〃	江戸初期	寄棟茅葺　重要文化財
C	大久保墓地	墓地	中世（室町）	墓石群、大永・天正・天文の板碑、五輪塔
D	上ノ郷墓地	〃	中・近世	墓石、方形土壇
E	惣福寺鎮守　天満宮本殿	建造物	室町（天正4、1576）	棟札写し、一間社春日造、府指定文化財
F	慈眼院本堂・多宝堂	〃	鎌倉（文永8、1271）再建	高10.5m、重要文化財、国宝　本尊大日如来、府指定文化財
	日根神社本殿　摂社　比売神社本殿	〃	室町～桃山	一間社春日造檜葺　府指定文化財
G	意賀美神社本殿	建造物	室町（嘉吉2、1442）	棟札一間社春日造　重要文化財
H	嘉祥寺神社本殿	〃		府指定文化財
I	奥井家住宅	〃	江戸初期	豪農住宅　重要文化財
J	林昌寺銅鐸	出土地	弥生	袈裟襷文銅鐸、高さ38.8cm

第1表　遺跡一覧表（分布図参照）

検出されている。向井池遺跡においても（図３参照）洪積段丘高位面で、縄文時代後～晩期に属する石鏃[註1]（図２）が採集されている。

採集生活から農耕生活への移行過程を示す縄文晩期から弥生前期にかけての資料は、船岡山遺跡Ｂ地点や三軒屋遺跡などにみられ、農耕をおこなうにあたっての良好な立地条件である旧河道に面した地点に位置する。船岡山遺跡Ｂ地点では、縄文晩期から弥生時代前期にかけての溝、土坑墓、土坑など検出している。また三軒家遺跡では、同時期の竪穴住居址や土坑、ピットなどを検出している。土器は、縄文時代晩期長原式と弥生時代前期畿内第Ⅰ様式新段階が共伴して出土する。河内地方の長原遺跡で縄文時代晩期を船橋―長原式と型式設定され、長原式は畿内第Ⅰ様式古・中段階と共伴するとされた事実と泉南地方はやや様相を異にするが、地域差等の問題は今後の課題[註2]である。

弥生時代の集落は、三軒屋遺跡や男里川左岸、沖積段丘の縁辺や氾濫原に展開する男里遺跡が上げられる。両遺跡共に弥生時代前期から中期にかけて展開する遺跡で、樫井川や男里川各水系の最も生産を掌握しやすい地点に立地する事実は、水田の開発・管理、灌漑治水工事、或いは水稲耕作の播種、取入れなど年間を通じて労働力の投入を集約的に実施しなければならない弥生時代に生み出された集落即ち、拠点集落と考えられる。両遺跡は、開発、水利或いは、物資・情報交換等の側面で各水系単位で把握された地域の中枢としての役割を担ったものと想定される。両拠点集落は、大阪湾沿岸の南端地域に位置するため、地理的に紀伊と近接し、紀伊との物資や情報交換等の側面での交流は、激しかったものとおもわれる。[註3]弥生前期から中期にかけて継続、展開する両遺跡は、後期前半へとストレートに移行せず、西の辻Ｎ、Ⅰ式段階の遺構・遺物は検出されない。近接する紀伊の拠点集落、太田・黒田，北田井，岡村，田殿・尾中，小松原Ⅱの各遺跡群も同様の現象を呈する。泉州南部では、周辺の低地と樫井川や崖によって画された樫井川左岸の丘陵上に中期後半から後期にかけての住居址など検出された新家オドリ山遺跡等が知られるが、紀伊においては後期前半段階は、橘谷、滝ケ峰、船岡山、血縄各遺跡など低地の通常の集落立地とは著るしく様相を異にし、丘陵や山岳部或いは紀ノ川の中洲などに遺跡は立地し、出土する土器も泉州南部とは異なり、主に西の辻Ｎ・Ⅰ式併行期段階のものである。低地遺跡にこの期のものが存在しない事実と好対照をなす。和泉から紀伊にかけての弥生時代中期から後



第２図　向井池遺跡採集石鏃（Ｓ＝1/1）
（藤田正篤氏保管）

期への移行過程をどの様に理解するかは、河内平野の亀井遺跡など中期から後期へ連続する拠点集落の動態とも併せ今後の課題となろう。[註4]

古墳時代の集落址は、ほぼ弥生時代集落立地と同じくし、生産基盤も同様と考えられるが、遺物は各地域で多く出土するため、集落の増加も考えられる。羽倉崎遺跡や湊遺跡では製塩土器などが多数検出される。

又、古墳の分布をみると、泉佐野市域においては、前・中期古墳の存在はなく、兎田、城の塚、下村、新家各古墳群といった数基単位の小円墳で構成する後期古墳が散在するにすぎない。貝塚市域唯一の前方後円墳である丸山古墳や岬町・淡輪の西陵、宇度墓古墳などを中心とする各古墳群に比べて非常に古墳分布が希薄な地域といえる。向井池遺跡に近接して鏡山古墳が存在するがその実態については不明な点が多い。

白鳳建立寺院については、日根郡では樫井川を境として、北の加美郷に所在する禅興寺跡や南の呼吸郷に所在する海会寺跡などが知られている。また、長滝付近には整然とした土地区割が残り、条理制遺構も存在する。

平安時代の集落址は主に佐野川流域に所在する湊遺跡が上げられる。弥生時代後期も重複する複合遺跡であるが平安時代中期の掘立柱建物跡など多数検出されている。湊遺跡では、10世紀代の黒色土器に共伴して底部糸切りの土師器皿が出土する。紀伊においては、底部を糸切りで処理する土師器皿については、5寸、3寸の大小の区別なく、その出現と消滅の時期は瓦器と同様、11～14世紀にかけての時期であるが、湊遺跡では一時期古い10世紀段階に出現をみており、底部を糸切りで処理する工人の系譜など今後の課題と思われる。[註5][註6]

平安時代後期から中、近世にかけては遺跡数は増加する。主要な遺跡としては、檀波羅、樫井城、諸目、長滝、日根野城址各遺跡があげられる。長滝遺跡や日根野城遺跡などは近時、実施された大阪府教育委員会の分布調査によれば、弥生時代から江戸時代にかけての遺物が従来周知されていたラインよりも更に拡大して分布する事が判明している。広大な長滝段丘面の開発などを契機に中世農村集落が日根郡でいかに成立・展開したかなど今後調査の進展にともなって明確化される事柄であろう。[註7][註8]

註1．当協会　渡辺昌宏氏教示。

註2．『長原遺跡Ⅱ、Ⅲ』（財）大阪市文化財協会　1983・1984

註3．拠点集落の概念規定については、田中義昭「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』87号　1982　や酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』第3集　1984　等の一連の論文でなされている。

註４．酒井龍一「第２節　畿内大社会の理論的様相」『亀井遺跡』（財）大阪文化財センター　1985

註５．『湊遺跡』泉佐野市埋蔵文化財調査報告Ⅳ　泉佐野市教育委員会　1984　他に貝塚市で12世紀代の瓦器椀と共伴して底部糸切りの土師器小皿が出土している。『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅵ』貝塚市教育委員会　1984

註６．近接する貝塚市においては、11～14世紀にかけての中世土器類の出土がみられる。和泉型の瓦器椀である。紀伊においては、主に紀北の資料をつかって形態・技法・変遷過程の側面などを視点として瓦器椀の地域色を考察し、生産開始期から「旧郡単位」で生産と消費のサイクルが存在する事が明確化されている。「野田・藤並地区遺跡第２次整理概報」和歌山県教育委員会　1984　和泉にあっても見込みの暗文などを視点として、より詳細な地域色を設定できる可能性がとかれている。尾上実「南河内の瓦器椀」『古文化論叢』1983　和泉南部と紀伊の器種構成は11～14世紀にかけて同一で、単純である。羽釜についいては、様相が異なる。紀伊の12世紀以降15世紀初まで生産される紀伊型の羽釜は、岬町、阪南町、泉南市、貝塚市などで確認でき、生産と流通の視点から今後の課題となる。

註７　湊遺跡では、14世紀後半から15世紀前半期に盛期をもち、根来寺、高野山などで出土する白色系の土師器が出土している。村田弘「根来寺出土の白色系土器」『和歌山県埋蔵文化財情報』16　1985　他に貝塚市でも同時期に想定される包含層より白色系の土師器が出土する。５寸、３寸の規格をもつ瓦器椀、皿、土師器皿を主要食器とする11～14世紀にかけての土器類が、各地域の区別なく13世紀以降容量の縮少現象が生起し、15世紀前後を境に瓦器椀、土師器大皿など消滅するが、まさに器種構成上の変革期に、水篏された胎土で終末期の瓦器椀と同一形態をもって出現する白色系の土師器の存在は、瓦器擂鉢や土釜など中世後期での共通性の多い泉州と紀伊の瓦器生産工人の消長、生産と流通など考察する上で重要な点である。

註８．『空港連絡道路・空港連絡鉄道・計画予定地内埋蔵文化財分布調査概要』大阪府教育委員会　1985

「遺跡の環境」を作成するにあたっては、泉佐野市教育委員会鈴木陽一氏、泉南市教育委員会仮屋喜一郎氏、貝塚市教育委員会西岡厳氏から御教示をうけた。参考とした主要な文献には以下のものがある。

『男里遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』泉南市教育委員会　1982～5

『湊遺跡―84－２区の調査―』泉佐野市教育委員会　1984

『船岡山遺跡Ｂ地点発掘調査報告書』泉佐野市教育委員会　1985

『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要・Ⅴ』泉佐野市教育委員会　1985

『泉佐野市埋蔵文化財分布調査概要・Ⅰ』泉佐野市教育委員会　1985

Ⅲ．調査方法と成果

今回の調査対象となった向井池遺跡は、全長370ｍ、幅60～110ｍ、面積47,000㎡で、現状は山林、畑地、水田などである。調査は、遺跡の範囲、内容確認を主要目的とする試掘調査のため、一部の地域に試掘トレンチがかたよらない様に、調査地区全域に幅２ｍのトレンチを総延長500ｍ（1,000㎡）設定し、実施した。

１．調 査 方 法

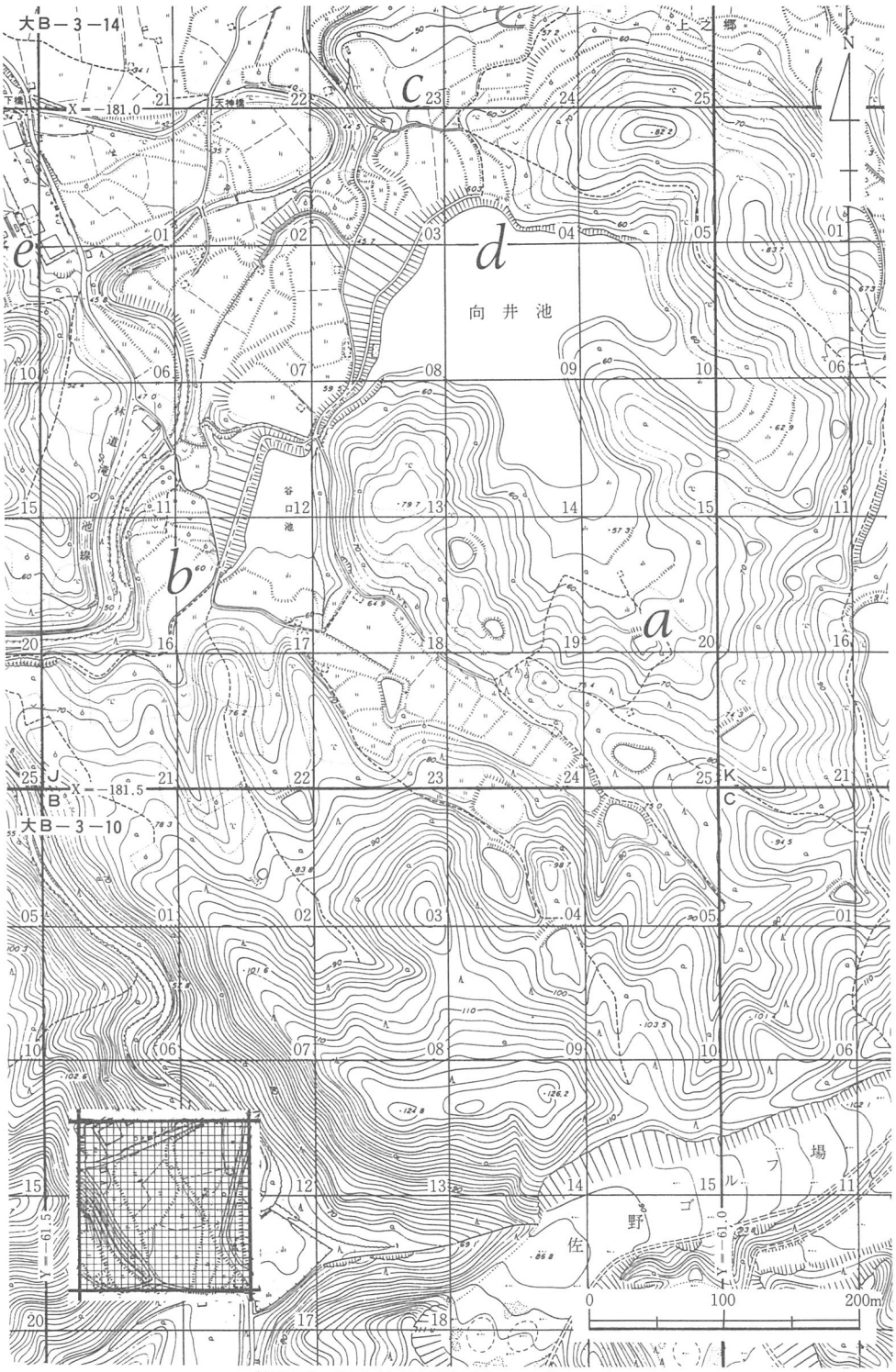
調査地区は、地形によって区分されるためＡ～Ｅ地区と仮称し、それぞれの地区に、地形に合わせた試掘トレンチを長短20本設置し、１～20までのトレンチ番号をつけた。

調査区の地区割りは、（財）大阪府埋蔵文化財協会が国土座標を基軸に設定した独自のものを使用する。これは、国土調査基本法に基づく新平面直角座標の第Ⅵ座標系を使用し大阪府下を、新版2,500分の１の都市計画地形図を基本にして４×４ｍ（16㎡）の方格区画割りをおこなうもので、大阪府下全域をカバーし、地点名称や遺物取り上げなど発掘調査上の最小単位を示す。地区割りの呼称方法は、新版の都市計画地形図の横軸－Ｘ、縦軸－Ｙ軸（縦軸は座標北を示す）を使用し、地形図を12等分している500×500ｍの区画を、ＡからＬのアルファベットで呼び、更に500ｍ区画を25等分して100×100ｍの区画を２桁の01～25までの数字で示す。この100ｍの区画を縦横25分割して625等分し、４×４ｍの区画をつくり、縦方向を先に、横方向を後にして、行列を小文字のアルファベットで呼称し、５桁の記号で示す。実測作業は、この地区割りのＸ、Ｙ軸を基軸線としておこなった。[註1]

今回の試掘調査対象地は、地形図２枚にわたっており、大Ｂ－３－14、Ｊ・Ｋと大Ｂ－３－10、Ｂ・Ｃに該当する。

Ｘ、Ｙ座標軸設定の割付作業は、測量会社に委託し、３級基準点の水準でおこなった。標高はＴ．Ｐ．を使用する。

調査地は、山地、谷地形を含み複雑な地形であるが、各トレンチ共に、0.1のバックホーと人力の併用によって調査を実施した。発掘は、各層の上面で遺構検出をおこない、層位ごとに順次この作業を繰り返し、最終的に各トレンチは断ち割りで地山の確認と土層の把握に力を注いだ。調査に際しては、谷地形に厚く土が堆積し、湧水した所は、安全性の問題から、作業を中断したトレンチ（６、７トレンチ）もある。



第3図　調査地割付図（S＝1／5,000）

a～c．藤田正篤氏遺物採集地点　　d．大阪府教育委員会立会地点　　e．式内意賀美神社

図面は、各トレンチの土層図（20分の１）を作成し、色調については、『標準土色帳』[註2]を使用した。写真撮影は、全景、土層断面等35ミリモノクロと並行してカラースライドで行った。

２．調 査 成 果

長短20本設定して実施した各試掘トレンチからは、遺構は検出されなかった。

Ａ地区

Ａ地区は、調査地の最も西方に位置し、現状は上、下二段にわかれてつくられた水田である。泉佐野市を一望できる地点で、地表面が二段共に平坦であるため、建物跡などの遺構を想定して、１～５トレンチを設定したが、各トレンチ共に、遺構・遺物の検出はなかった。

Ｂ地区

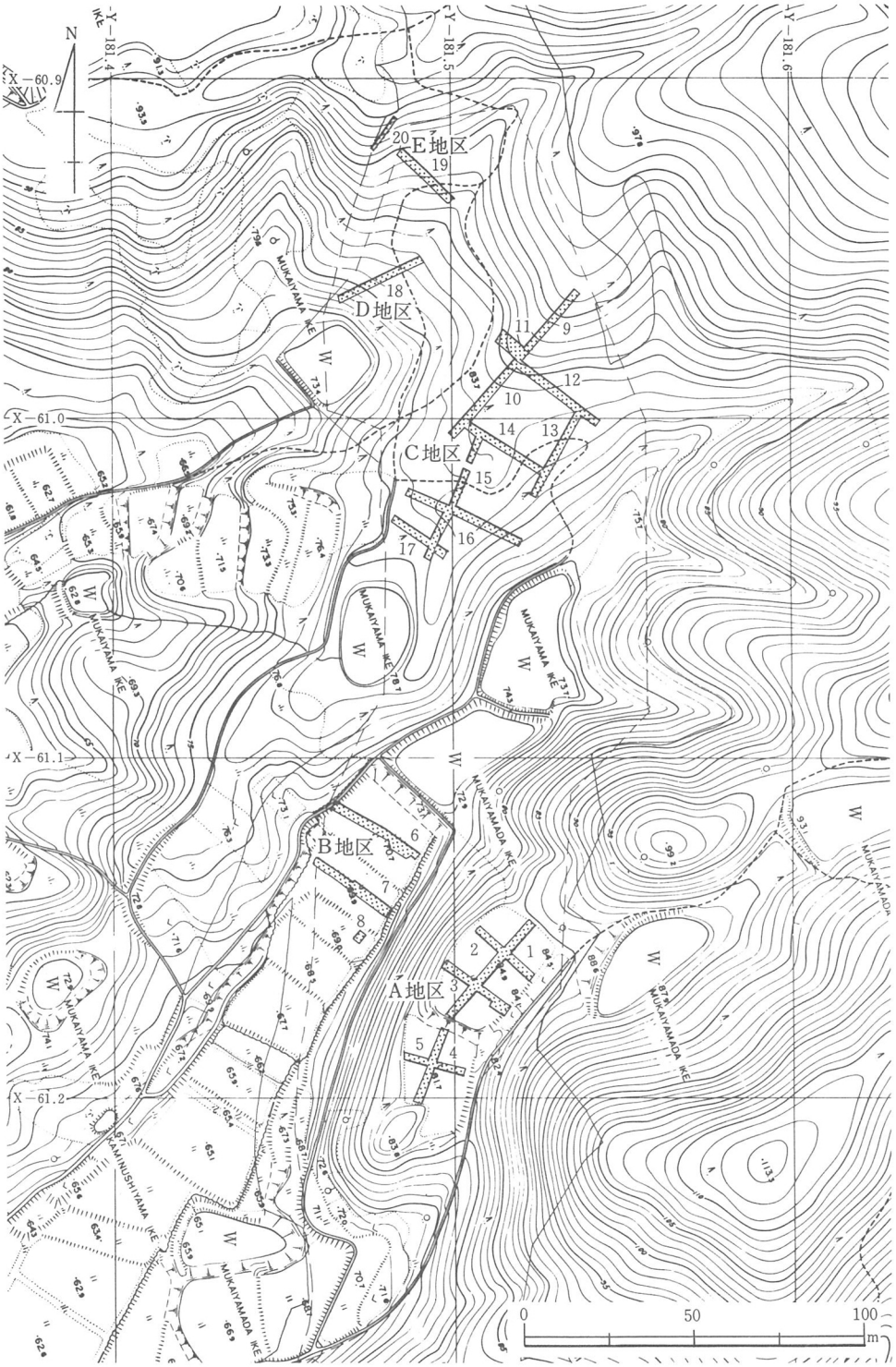
Ａ・Ｃ両地区にはさまれた谷状地形に位置し、現状は谷水田である。建物跡、水田跡、或いは東方に位置する溜池などに関連する水利施設などの遺構を想定して、６～８各トレンチを設定した。

調査の結果、６、７トレンチでは、耕土、床土（１、２層）より下位の４層上面で、両端に岩盤が検出された。岩盤は、両端より中央へ落ち込み、谷状地形を形成している事が確認できた。各トレンチ共に中央部は、地表下約４ｍ前後まで木片を含んだ粘土、砂層の互層で形成される。この層序は、東方に位置する溜池が氾濫し堆積したものと考えられる。出土遺物は、２層床土より、近～現代にかけての陶磁器類が出土したのみで、粘土、砂層など４層以下の堆積土より遺物は一切出土しない。

Ｃ地区

調査地区の東方に位置し、現状は山林である。Ｃ地区は、更に東部と西部に二区分される。東部地区は、地表面が平担なため、建物跡などの遺構を想定して、10～13各試掘トレンチを設定した。西部地区は、現状において古墳状の隆起が確認できたため、14~17各試掘トレンチを設定した。

調査の結果、東部地区の各トレンチからは建物跡に関連する柱穴、礎石、溝などの遺構は一切検出されなかったが、11、13各トレンチで、人工的な造成と削平を実施してつくられたテラス状の段を検出した。段の形成時期については、谷を埋めた11トレンチ南端、整地土の３層中より、近～現代陶器が出土している事から、段の築造時期も山城等に関連



第4図　トレンチ位置図（S＝1／2,000）

するものでなく、近代以降の開墾などに伴なう遺構と考えられる。11、12トレンチでは、11トレンチは南へ、12トレンチは東へと各トレンチの中央部付近より地山が傾斜をもって落ち込む事から、3層以下の堆積土は、幾層にもわたって斜面に自然堆積した層と耕作にともなう整地した層が確認できた。

西部地区は、調査の結果、古墳などに関連する隆起ではなく、自然地形の高まりになる事が判明した。西部地区、溜池側に設定した17トレンチ北部などに堆積した砂層中から、近世とおもわれる土師器片など少量出土している。

D、E地区

調査地の最も東方に位置し、現状は山林である。地形からみて、古墳、窯跡、中世墳墓跡などの遺構を想定できたため、18、19、20各トレンチを設定し調査したが、各トレンチ共に表土を除去すると地山になり、遺構・遺物は検出されない。

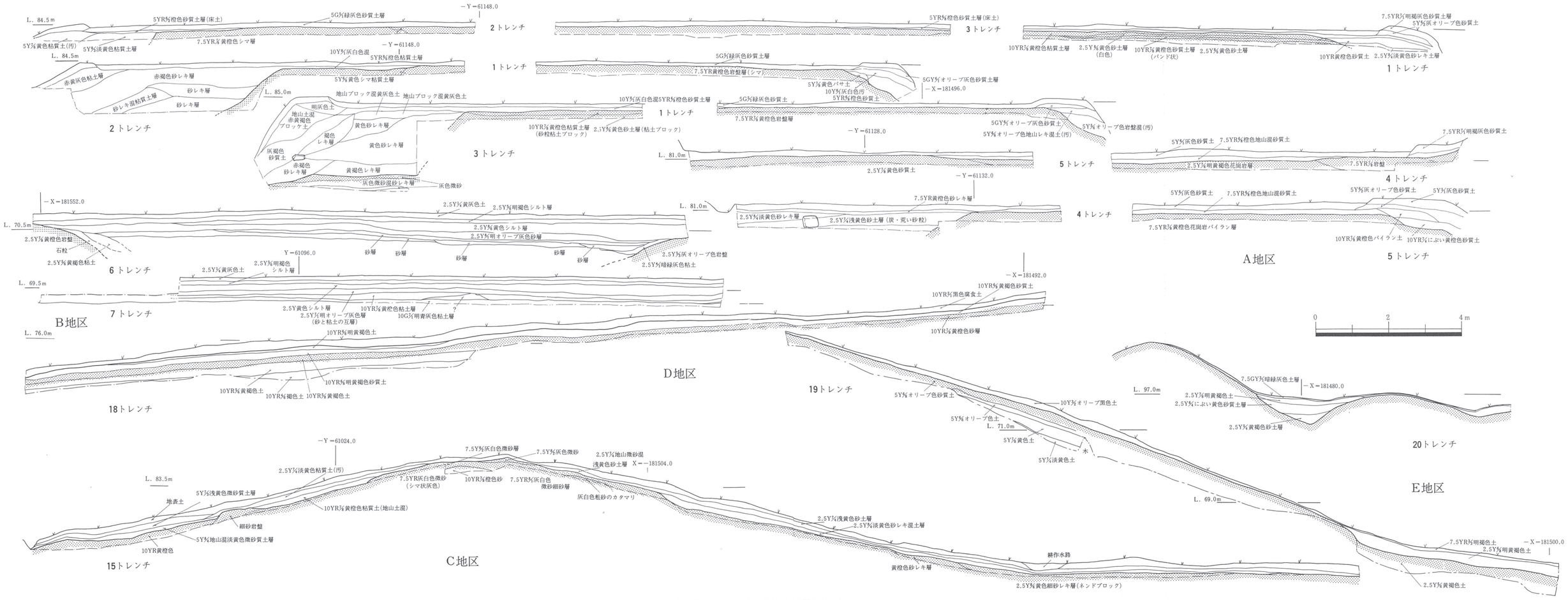
註1.『発掘調査規程』（財）大阪府埋蔵文化財協会　1985年6月を参照。

註2.小山正忠・竹原秀雄編　農林省農林水産技術会議事務局、（財）日本色彩研究所監修『新版　標準土色帖』（株）日本色研事業　1967年

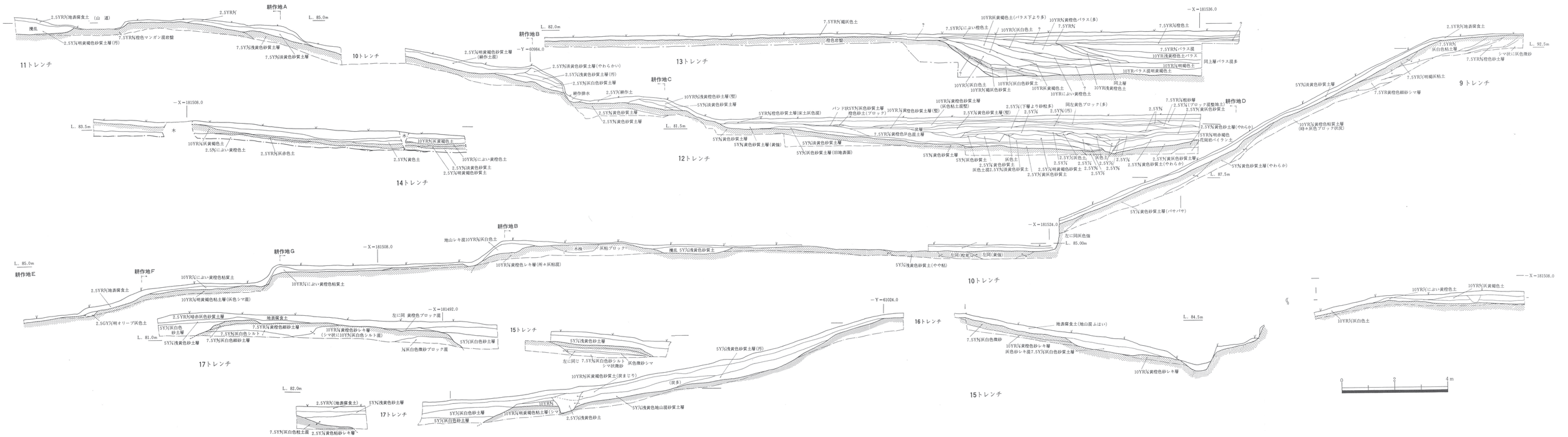
地区	トレンチ No.	長さ（m）	層位 現地表面（T.P.）	観察事項・検出遺構	出土遺物	所属時期その他の備考
A	1	38.0	(84.4m～84.5m) 耕作土下は花崗岩バイランの地山露呈するが、部分的に床土の5YR⅝橙色が挟む。両端は地山のを削った埋土で、汚れた粘質土である。	屋根開削して水田化している。両端は地山の土で整地している。もともとの尾根の落ちがトレンチ手前3mで急におちる西側はゆるやかな落ちとなる。	ナ　シ	
	2	22.9	(84.4m～84.55m) 基本層序は1トレンチに同じ。東側落ちの盛土は地山を削った砂レキ、レキ層である。	西側の尾根の落ちはトレンチ手前1.5m。東側は尾根の落ちは手前5mより急に落ちる。盛土下は粘土と地山を削った岩盤土となる。	東側落ち盛土中より土師器細片 （図版5－4）	江戸以降 1・2・3トレンチを尾根を開削して築造した現代の水田部分にトレンチを縦横に設定したが耕作土下は花崗岩バイランの地山が広がり岩盤が露呈する。
	3	23.6	(84.4m～84.5m) 基本層序は1トレンチに同じ。東側落ちの盛土は地山を削った砂レキ土等であるが地山粘土がブロック状にまじる。	西側の尾根の落ちは手前1.5m、東側は手前5mより落ち、粘土と地山土で盛土を行う。GL2mで谷底でありゆるやかに東へ落ちていく。 現代水田以外に遺構はナシ。	ナ　シ	南の2・3トレンチで確認した落ちは東側の岩盤の険しい尾根との間の谷のかたでありそれを石で下段を固定させて、整地築造している。近世以降の耕作に伴った仕事である。
	4	23.5	(81.5m～81.4m) 耕作土下は花崗岩のバイラン南側は岩が露呈する。間層として地山混土である7.5YR⅝橙色土が挟む。	北側からのびる尾根節で上段水田地山との差は3.2mあり尾根はなだらかに落ちていたと思われる。南側の高まりは岩のかたまりであり開削にあたってとりのこしている。	ナ　シ	1・2・3トレンチの水田同様4・5トレンチを設定した下段の水田も岩盤の尾根を開削して東側の谷を埋めて水田を築造している。
	5	19.5	(81.15m～81.3m) 基本層序は4トレンチに同じ。西側の落ちには畦畔の下に地山土の盛土。東側は南側の岩脈の土砂の盛土層。	東側は6.5m手前で地山の落ち確認。谷の南側を削った土で盛土し谷を埋める。 現代水田以外に遺構はナシ。	ナ　シ	東側の谷部分には岩盤を開削した時の岩を投げ入れて水田を作る為に整地を行っている。整地土中より1m掘り下げたが遺物は出土しなかったが炭が部分的にかんでいる。
B	6	26.0	(70.9m) 耕作土2層下は幅15cmの整地土である黄褐色の床土が広がる。 その下は砂層、粘土の互層であり自然の堆積である。 尾根の地山岩盤が手前2mで落ちる。	西、東端で尾根の落ちを確認。谷の上部の幅員は、16mである。	耕作土中より染付細片（唐津白付け） （図版5－6）	江戸　19C？
	7	28.0	(69.75m～69.8m) 耕作土は整地土でもある床土が2層25cmの下はオリーブ色の砂層と青灰粘土の互層である。	トレンチ幅28mすべて河谷の中に入り谷の幅員は35mほどになり広がる。	耕作土中より染付細片（伊万里？） （図版5－5）	江戸　18C末～19C？ 6・7・8トレンチの谷水田築造時期は近世以降であると思われる。現代水田耕作土下の整地土と、耕作床土はこの時期のものであろう。
	8	3.0	(69.0m) 基本的に層序は7トレンチに同じ。耕作土面下は河谷地の自然堆積。	6・7・8トレンチも現代水田以外に遺構はナシ。	ナ　シ	耕作整地土下は河谷地の自然堆積であり微砂砂層と粘土が互層の堆積をなす。
C－Ⓔ	9	21.4	(93.0m～85.9m) 地表腐食土下は5Y⅔浅黄色砂質土の間層の下は黄褐色土の地山が広がる。	完全な山傾面の地形であり地山が粘土の間に細砂層がシマ状水平堆積。	ナ　シ	上部の頂上付近は平坦化されており、古い時期に耕作等により削られたと思われる。
C	10	39.1	(85.0m～83.0m) 地表腐食土下は部分的には間層の汚れた5Y⅔浅黄色土下は黄褐色の地山層が続く。段部分には地山を削ったレキ混の盛土あり。	平坦地になっているが、尾根を開墾して傾面に盛土を行う。	ナ　シ	4段の平担地となっており、耕作に伴っての平坦面で4枚の畑地より成る。
	11	12.4	(86.2m～85.1m) 地表土下は盛土部分では7.5Y⅝淡黄色土があるがバイランの地山である。	平坦面を幅4mと拡大して精査を行ったが地表土下は地山が露呈した。 耕作に伴う攪乱はあるものの遺構ナシ。	ナ　シ	南方向にのびる主尾根の平坦面で、耕作によって平坦にされている耕作地にあたる。

地区	トレンチ No.	長さ (m)	層位 現地表面（T.P.）	観察事項・検出遺構	出土遺物	所属時期その他の備考
C	12	30.9	(83.9m ～81.9m) 地表土下は黄色砂質土の地山もしくは間層をはさんで地山。畦畔分と最下段平坦部は、2層の耕作土下は3層橙色の床土と黄褐色土を基本とする盛土層であり8層目は旧地表土である5Y 5/1灰色砂土層と黄灰色砂質土をはさんで地山となる。	地山を削った土砂がブロックをまじえて斜面に盛土されて平坦面を作る。最下段は、旧地表土の上に地山を削った上で、盛土され一度耕作地として利用されている。鍵層バンド層のこまかいのは盛土の工程のちがいである。さらに耕作土の上に地山土の橙色土を整地して水平にし、床土をはって耕作土がのる。13トレンチの西14トレンチ東下段は耕作土下は岩盤の地山。遺構ナシ。	南端2次整地下攪乱層 染付茶椀 (図版5－9)	明治　19C以降 11トレンチからだと4段に段をつけて平坦にされた耕作地である。3段最下段の平坦地（13トレンチ平坦地）は、谷節が東端で入りこんでいる所を50cmほど整地（L. 81.5付近まで）し、1回目の耕作地としている。染付はそれを切る攪乱層より出土している。さらに水平に深い所で50cmの整地を行っている。これは耕作土が水田の砂土であることと、14トレンチ東方の段で土管が付設していたこととあわせ近代以降水田としてA地区同様利用されていたことを示す。
	13	29.0	(81.9m) 北は12トレンチにほぼ同じ。南は耕作土下は橙色の岩盤層で地山。		ナ　シ	
	14	15.9	(13.9m ～81.9m) 1段～2段目は、12トレンチに同じ。耕作土下は灰黄色の間層をはさんで淡黄色砂質の地山となる。東の平坦地は3トレンチに同じ。	1段～2段目は12トレンチ2～3段目の平担面耕作地に当たる。3段目の平担地は12トレンチ4段目、13トレンチの平坦地に相当する。	ナ　シ	
C－Ⓦ	15	46.0	(84.85m ～81.5m) 北半は14トレンチ上段に同じ。頂上部、地表土下は灰白色微砂及びシマ混黄褐色粘土の地山で北は地山混の間層をはさむ。地山南半は3層目に5Y 7/4浅黄色の粘質土が堆積し上面には炭がかむ所があり、土器片が出土した。	浅黄褐色粘質土は25cmと厚く堆積しているが、南壁では薄くなり、傾面にも耕作の客土の移動があったものと思われる。	土師器細破片 (練鉢？) 染付細片 (図版5－2)	江戸　18C？ 隆起部の裾の北、南部は畑地として利用されている。もともとの尾根節の高まりで耕作による土の移動で丸味をおびたのであろう。
	16	38.0	(85.0m ～79.95m) 頂上部より、地山傾面につれて地表下は間層の2.5Y 7/4浅黄色粘質土や地山混の黄色微砂層が入る。 地山は、細砂層、粘土層、レキ層と異にしている。	西側は高まり傾面東の裾はゆるやかな2枚にわたる耕作地として以前利用されていたと思われる。遺構はナシ。	平瓦細片 (図版5－7)	近・現代　19末～20C 排水溝より黒瓦が出土した。
	17	19.3	(82.0m ～80.75m) 地表下は地山の窪んだ所に浅黄色砂土層がはまるが、その下は花崗岩のバイラン微砂層である。	西側の地山の落ちは谷地形の落ちであり、耕作に伴って整地している。	地山直上 土師器細片 (図版5－1)	江戸以降 平坦面でありもともとの耕作地である。中央部にはその時の攪乱がおよぶ。南西には、溜池が地山を掘りこんで作られている。
D	18	29.5	(70.0m ～77.4m) 表土下は間層の明黄褐色床土と黄褐色砂質土40cmの整地土の下は褐色土と砂層の互層である。	部分的に残る旧耕作土は、山土の堆積であり耕作土下は河谷部の自然堆積である。遺構はナシ。	ナ　シ	現在は荒地及び雑木林であるが、もともとは谷水田にあたっている。下方には谷を堰とめて溜池がある。それらの築造時期についてはB地区と同様近世以降であろう。水田としての利用は近代頃迄のようであるが今も湧水が激しかった。
E	19	23.0	(67.2m ～73.6m) 表土下は、2.5Y 6/8明黄褐色の間層をはさんで黄褐色の花崗岩の風化土で地山が続く。	完全な山の傾面の地形である。花崗岩の風化土は時折岩盤の風化をのこしている。	ナ　シ	
	20	12.0	(93.5m ～91.6m) 腐触土である7.5GY 3/1暗緑灰色下は地山層のバイラン土。窪地は砂層が堆積。	地表腐触土下は、岩盤花崗岩バイラン土の地表が露呈する。中央部は自然の堆積である。遺構はナシ。	ナ　シ	古墓等の小さな降起が認められたので幅1mで立割を行ったが自然の高まりであり中央部の窪みは、農作業に築造した山路の一部であろうと思われる。

第2表　試掘トレンチ観察一覧表



第5図　A・B・D・E地区土層断面図（S＝1／80）



第6図　C地区土層断面図（S＝1／80）

Ⅳ．ま　と　め

向井池遺跡周辺は今後大規模な開発工事が予定されており、遺跡景観は一変するものと考えられる。向井池遺跡を語る資料は少なくその内容に関しては不明確な点が多いが、既往の採集遺物や今回の試掘調査の成果に依拠して整理し、まとめとする。

向井池遺跡は、大阪府文化財分布図[註1]によれば、意賀見（おがみ）神社東方に位置する向井池を中心にマークされており、採集遺物としては石鏃、サヌカイト片等が上げられ、弥生時代以降の遺跡として把握されていた。近畿自動車道和歌山線が計画されて以降の遺跡周辺部に対する大阪府教育委員会や藤田正篤氏[註2]の踏査によれば、向井池西方にひろがる３ケ所の地点（図３ａ～ｃ）で、縄文時代後～晩期に属する石器類[註3]が採集されている。また今回、試掘調査を実施した近畿自動車道和歌山線内の調査地点は、周知されていた向井池遺跡の南方に位置し、調査からは遺構は検出されなかった。以上の採集資料や試掘調査成果からすれば、向井池遺跡の範囲は、従来周知されていた向井池を中心とする地点より拡大し、西方に位置する意賀見神社に至るまでの段丘をも含むものであり、南限については、試掘調査地点までは及ばなかったものと考えられる。

遺跡の中心部と推定される向井池から意賀見神社前にひろがる段丘面を対象とした調査例は、現在までのところ溜池である向井池の池底部分に対して実施された大阪府教育委員会の試掘調査例があるのみで、他は表採資料が存在するにすぎない。表採資料は、縄文時代後～晩期に属する石器類[註4]が、試掘調査では中世を中心とする遺物が出土している。

向井池遺跡周辺における縄文時代後～晩期遺跡は、樫井川流域の低位段丘の縁辺にひらけた三軒屋遺跡が周知されており、和泉地域では遺跡数の増加、立地条件の変化など縄文時代の一つの画期とされる。向井池周辺で採集された石器は、この期に属するものであり、一連の縄文時代後・晩期に属する「低位段丘の縁辺とか、砂丘上といった低地に進出」[註5]する遺跡と集落立地を異にする向井池遺跡との関連が問題となろう。また意賀見神社前にひろがる段丘部分の開発に伴い築造されたと想定される向井池の池底部分から中世に属する遺物の出土がある事は、上之郷（かみのごう）一帯の地域開発の歴史を知る上で重要であり、今後の課題となろう。

向井池遺跡を語る資料はあまりにも少ないが、今後の地道な調査例の蓄積に伴ない問題は多岐に展開されるものと考えられる。

註１．『大阪府文化財分布図・地名表』大阪府教育委員会　1977

註２．「泉佐野市文化財分布図」泉佐野市教育委員会　1984についても同じ。

註３．藤田正篤氏採集遺物。（図版５）

註４．大阪府教育委員会、広瀬和雄氏御教示。

註５．広瀬和雄編『男里遺跡発掘調査報告書』泉南市教育委員会　1978

図　　版

図版1　調査地航空写真

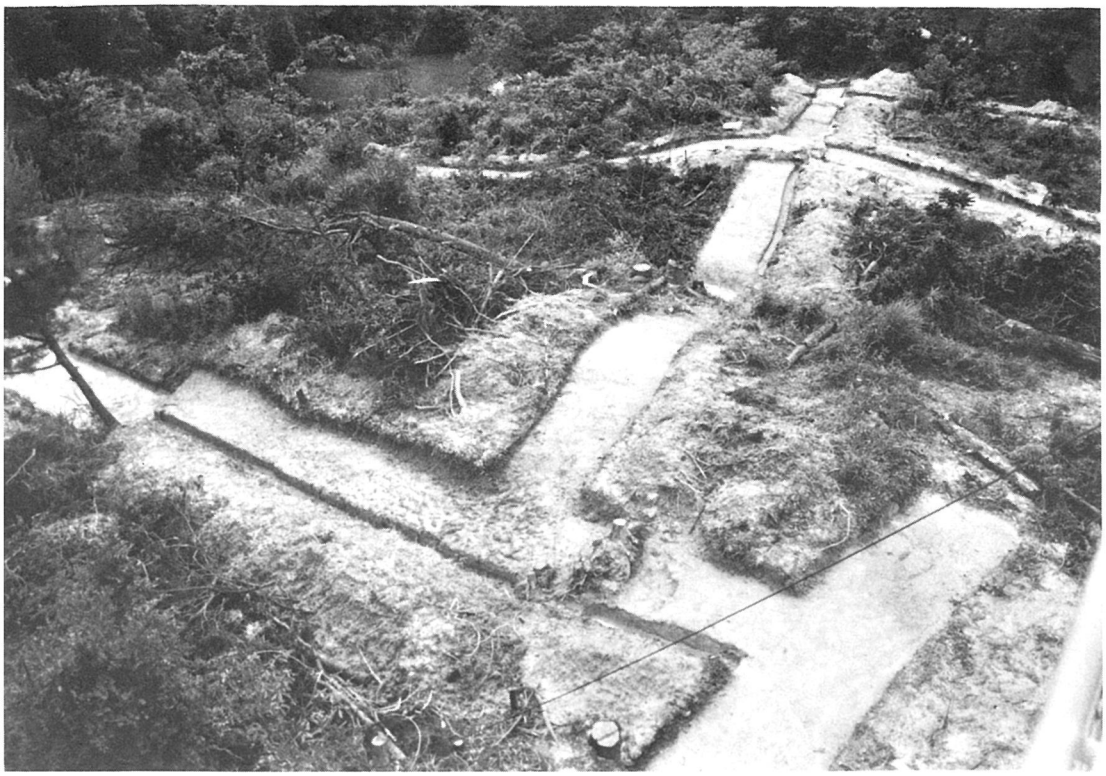
（左上方が北方向）

図版2　向井池遺跡遠景

向井池遺跡全景（東より）

向井池遺跡全景（西より）・池の右側が調査地

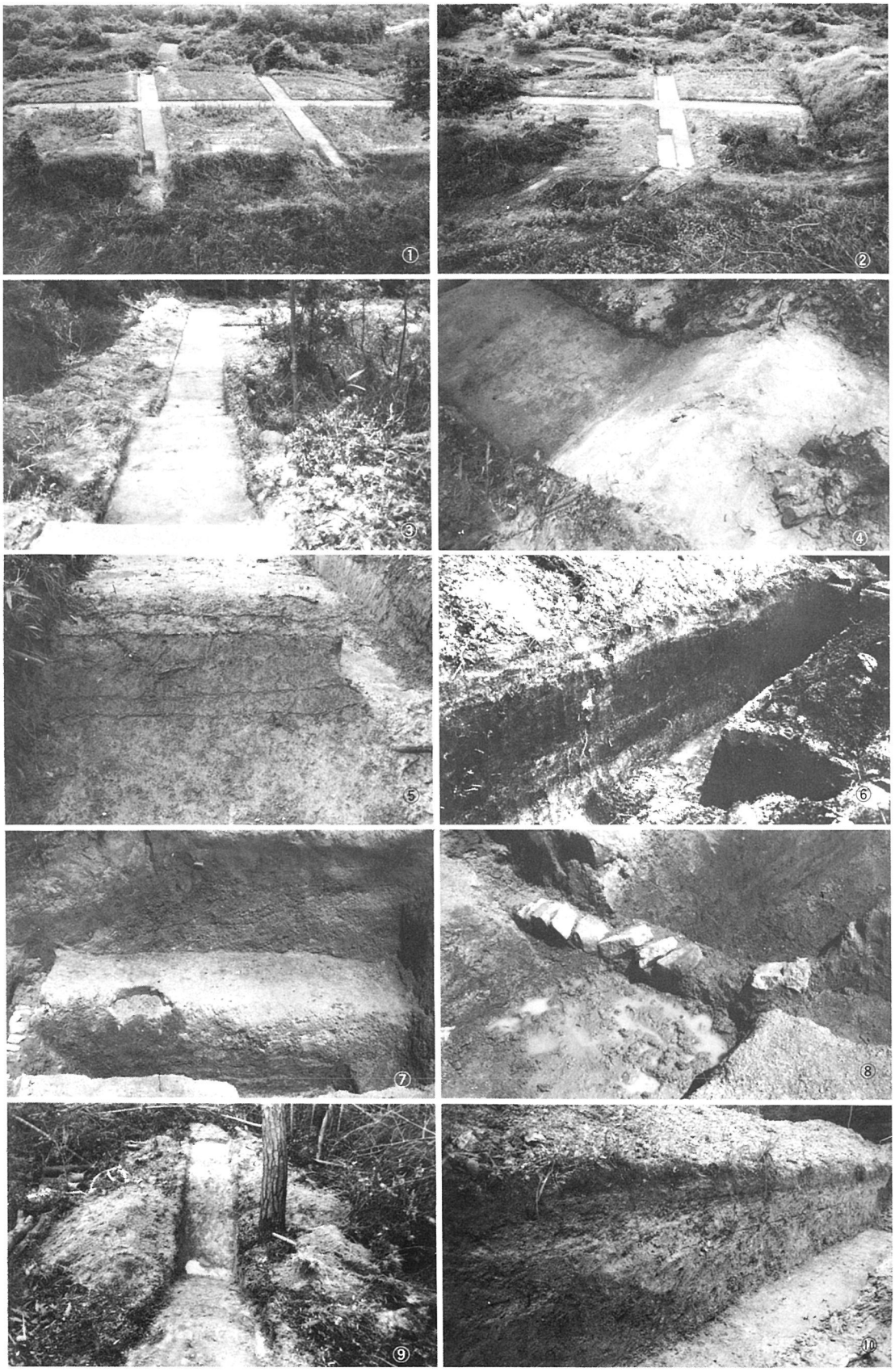
図版3　各調査地区全景



C地区東部全景（東より）

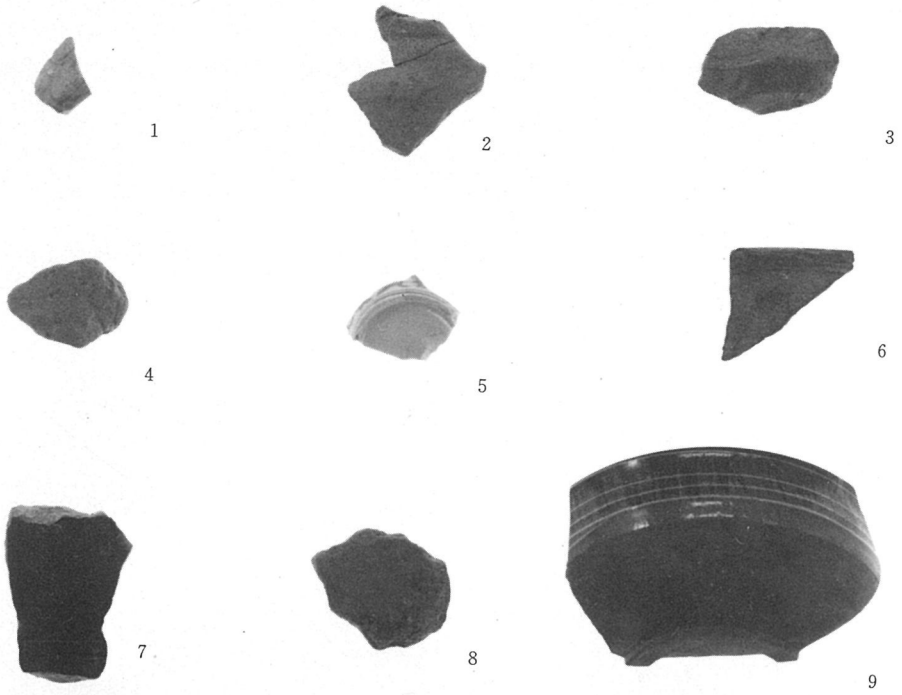
C地区西部全景（西より）

図版4　各トレンチ部分

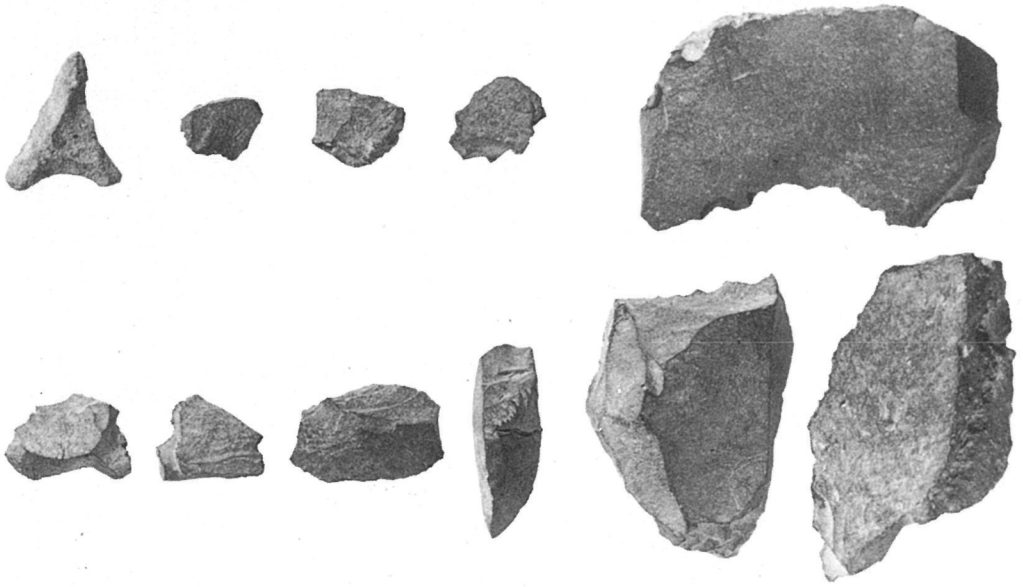


①②　A地区調査区全景　③④⑤⑥　C地区・12トレンチ　⑦⑧　A地区・3トレンチ
⑨　E地区・20トレンチ　⑩　C地区・17トレンチ

図版5　向井池遺跡出土遺物



調査地出土遺物



藤田正篤氏採集遺物

(財) 大阪府埋蔵文化財協会報告　第1輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

向　井　池　遺　跡

―― 試掘調査報告書 ――

昭和60年7月31日発行

編集・発行　財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

大阪市東区谷町2丁目36番地 大手前ウサミビル

印　　刷　株式会社 中島弘文堂印刷所